

「道をつくる」

落合中学校 加藤 梨々香

今年も人権について考える夏がきました。と、いうのも私の学校では毎年、夏の課題として人権をテーマにした作文を書くことになっているのです。

ずっと頭を悩ませてきたこの作文も三年目ともなると、ちょっと本気で向き合えるようになりました。

さらに、今年の夏は今までとは違って『いじめ』が社会問題として毎日のように報じられてきました。

あの悲しい事件があったからです。しかし、何か大きな事件になってからでは遅いのです。人の命が失われてからでは遅いのです。もっと、もっと普段から『いじめ』に気づく目と心。絶対に許さないという強い意志を持たなくては！！

でも、頭では分かっているけど何もできなかった悔しい自分があるし、どこかで本当にいじめはなくせるのだろうかという悲しい気持ちもすみにあります。

あれは小学三年生の時です。「その靴下、私と同じじゃん。やめてや。同じとか最悪。」一人の女の子を囲んで2、3人が集まっています。「明日からはいてこんといてね。」と、言い捨てて立ち去ります。「なんてムチャクチャな」と腹が立ったのに、その気持ちを声に出すこともできず、まして「大丈夫？」と寄り添うこともできず、あげくに先生や親に話すことさえ出来ませんでした。

その日から彼女たちの嫌がらせがエスカレートしていったのは想像通りです。

「靴下が一緒だった。」・・・笑えるような言いがかりですが、それを見ているしかなかった自分さえ心にずっと残っているのです。彼女にとっては、どれほど傷になっているのでしょうか。考えるとこわくなります。

また、小学6年生のときです。1年前のグループ分けで一人だけとり残された経験をもっていた彼女は普段とても明るく過ごしていたのに、その1年後、今度は修学旅行のグループ分けの時間になると1年前のことがよみがえり、不安と怖さで涙がとまらなくなったのです。このとき、心に負った傷は外見はどんなに平気に見えても消えないのだということを知りました。

このように、『いじめ』のきっかけはとんでもなく『つまらないこと』だったりどうしようもなく『気付きにくい』ものだったりします。でも、見てない気づいていないは、きっと自分をかばう言い訳で、みんな本当は体でピリピリ感じとっているはずです。一人で立ち向かう勇気がないだけです。

では、一人ではなく同じ思いを持った人がたくさんいればどうでしょうか。

国語の授業のとき中国の作家、魯迅（ろじん）の作品を勉強しました。「故郷」の最後にこうありました。

“希望はもともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。

もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ“ と。

今、私が『いじめ』の根絶を一人で訴えても、おそらく何も変わらないかもしれません。私と同じ思いを持って歩く人が多くなれば、それが『いじめを絶つ道』になるのです。みんなが同じ願いを持って歩いて行く社会。

みんなで『いじめは許さん』という地域。私はみんなと歩くことで『道』をつくりたいと思っています。